

英語科・英語活動

英語科・英語活動部 原 雄規 高橋 洋介
研究協力者 津久井貴之 渡部 孝子

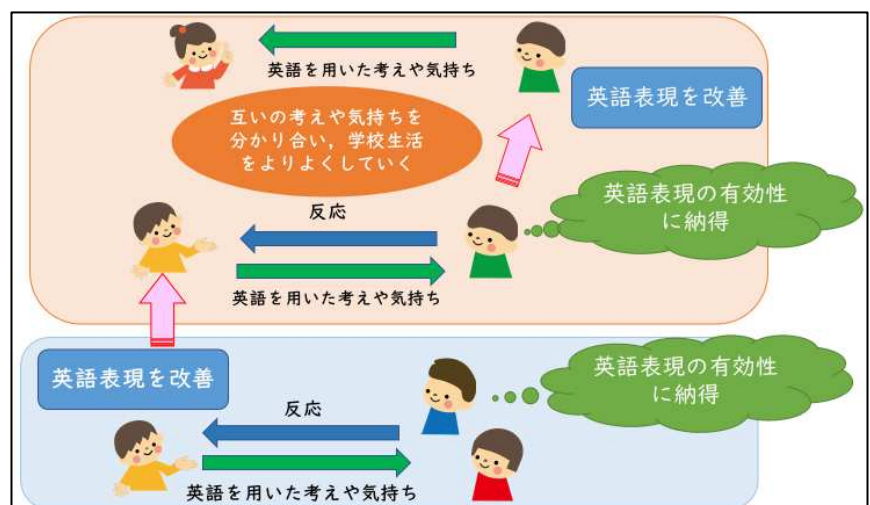
Ⅰ 英語科・英語活動における「社会に変革を起こす子ども」について

聞き手の反応を基に改善した英語表現で考えや気持ちを伝え、相手の英語表現を改善する子ども
この際、相手が英語表現の有効性に気づき、納得できる必要がある。

本校では、子どもたちが将来「社会に変革を起こす」ことで、ともによりよく生きていくことのできる社会を創造できるようになることを目指している。「社会に変革を起こす」とは、自分も他者も納得しながら、現在の社会にある問題に対する課題を見いだして実践していくことである。ともによりよく生きていくことができる社会を創造するためには、英語科・英語活動を学ぶ本質的な意義である「英語を用いたコミュニケーションを通して、人と人とが分かり合うこと」が欠かせない。なぜなら、英語科・英語活動の学習において、考えや気持ちを伝え合うことが困難である英語を用いて、根気強くコミュニケーションを図ることを通して人と人とが分かり合うことが、社会にある問題に立ち向かい、ともによりよく生きていくことのできる社会を創造していくことにつながっていくからである。

本校英語科・英語活動部では、「社会に変革を起こす子ども」を「聞き手の反応を基に改善した英語表現で考えや気持ちを伝え、相手の英語表現を改善する子ども」とした。英語科・英語活動の問題解決的な学習において、コミュニケーションを図る目的や場面、状況における自分の考えや気持ちをうまく英語を用いて表現できていないことから、単元の課題をつかむ。この単元の課題を解決するために、コミュニケーションを図ったり、聞き手の反応（質問・返答・助言）を基に自らのコミュニケーションを改善したりする。そして、新出の英語表現や既習の英語表現を用いてコミュニケーションを図り、単元の課題を解決していく。このような問題解決的な学習の中で、子どもたちは聞き手から得られた反応を基に、分かりやすく伝えるために、英語表現を改善する姿が見られた。また、その改善された英語表現を聞いた子どもは、英語表現の有効性に気づき、納得することで、自分の英語表現を改善し、相手とより分かり合うことができていた。

このように、英語でのコミュニケーションを通して、人と人とが分かり合っていくためには、分かりやすい英語表現の有効性に気づき、納得しながら英語表現を改善していくことが必要である。このことから、本校英語科・英語活動では、「社会に変革を起こす子ども」を「聞き手の反応を基に改善した英語表現で考えや気持ちを伝え、相手の英語表現を改善する子ども」とした。



<図Ⅰ 英語科・英語活動における社会に変革を起こす子どものイメージ>

2 研究の方向

1 年次研究では、英語科・英語活動の「話すこと（発表）」の領域における「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れる要因を情報活用の視点から明らかにし、その要因を基に ICT 活用による学習指導の工夫を以下のように再考した。

情報活用の視点からの要因

・話し手が、「教師や A L T がモデルで用いた英語表現」「既習及び新出の英語表現」を用いることができる。【情報の収集】

・話し手が、「既習及び新出の英語表現や伝え方」を分かりやすく工夫することができる。

【情報の吟味】

・話し手が、「英語を用いてコミュニケーションを図った際の聞き手の反応」を得ることができる。

【情報の収集】

ICT 活用による学習指導の工夫

・自分の必要に応じて英語表現を確認できる「教師や A L T のモデル」動画の用意

・タブレットを用いて画像を提示しながら、考えや気持ちを伝え合う機会の設定

・タブレットを用いて自分の伝え方について友達からの評価を確認する機会の設定

実践から、自分の必要に応じて英語表現を確認できる「教師や A L T のモデル」動画を用意したことにより、自信をもって英語表現を発音する子どもの姿が見られた。また、タブレットを用いて自分の伝え方について友達からの評価を確認する機会を設定したことにより、友達からの評価を基に、聞き取りやすい声の大きさや速さで伝えること、聞き手と目線を合わせて話すこと等、伝え方を改善する姿が見られた。

一方で、聞き手は話し手が伝えていることに対して、返答をしながら聞こうとすることはできているが、相手の英語表現をより分かりやすくするために質問・助言をしようとしていた子どもは少なかった。また、話し手は、より分かりやすく自分の考えや気持ちを伝えようという思いに至らず、英語表現を改善しようとすることなく、同じ英語表現を繰り返し伝えている子どもが多かった。

これらのことから、「社会に変革を起こす子ども」の姿がさらに現れるように、課題となる姿を分析して、1 年次研究に引き続き、「話すこと（発表）」の領域における研究を進めていくこととした。

3 研究内容

（1）英語科・英語活動で重視する非認知的能力

1 年次研究を進めていく中で見られた「社会に変革を起こす子ども」に関わる課題となる姿を分析する。分析を進めるにあたり、全体研究を受け、まず O E C D の示す非認知的能力の 3 つの分類である「目標の達成」「他者との協働」「情動の制御」を、英語科・英語活動の教科特性に照らして具体化する。

3 つの分類	英語科・英語活動の教科特性に照らした 3 つの分類の具体	
<u>目標の達成</u>	忍耐力	：自分の考えや気持ちがすぐに伝わらなくとも、あきらめずに、根気強くコミュニケーションを図り続けようとする思い
	自己抑制	：自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えるために、自分の英語表現の振り返りをしようとする思い
	目標への情熱	：英語表現を改善し、自分や他者の考えや気持ちを分かりやすく伝えようとする思い

<u>他者との協働</u>	社交性	：自分の考えや気持ちを伝えたり，他者の考えや気持ちについて質問・返答・助言をしようとしたりする思い
	敬意	：他者の考えや気持ちを理解するために，寄り添おうとする思い
	思いやり	：他者のことを考え，自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えるために，英語表現を改善しようとする思い
<u>情動の制御</u>	自尊心	：他者に伝えようとしている自分の考えのよさや気持ちを自覚していること
	楽観性	：正確な英語表現で伝えられなくても，相手に自分の考えや気持ちをきっと理解してもらえると考える前向きな思い
	自信	：自分の英語表現は他者に伝わるという前向きな思い

次に課題となる姿の要因を考え，その要因と英語科・英語活動の教科特性に照らした3つの分類の具体との関係を考える。

課題となる姿	その姿の要因
・考えや気持ちを伝える際の英語表現を改善することなく，繰り返し伝える姿（話し手） ・他者の発表を聞く際に，質問や助言をせずに発表を聞いている姿（聞き手）	・ <u>コミュニケーションを図る目的や場面，状況に魅力を感じていない。</u> ・ <u>他者の英語表現をより分かりやすくしようという思いをもてていない。</u>

コミュニケーションを図る目的や場面，状況に魅力を感じていないことの原因として，英語を用いてコミュニケーションを図る必要感のある相手，目的や場面，状況になっていなかったことから，英語を用いて自分の考えや気持ちを伝えたいという目標への情熱が欠けていたことが考えられる。

また，聞き手が話し手の英語表現をより分かりやすくしようという思いをもてていないことの原因として，これまで聞き手は話し手の伝え方に意識して反応（質問・返答・助言）をすることが多く，話し手の英語表現をより分かりやすくしようという目標への情熱が欠けていたことが考えられる。

英語科・英語活動の教科特性に着目すると，発表する相手に分かってもらえるように，目標への情熱をもって自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えたり，質問・返答・助言をしたりすることが大切である。

そこで，本校英語科・英語活動では，重視する非認知的能力を目標への情熱とした。これらの非認知的能力の発揮された姿は，以下のとおりである。

目標への情熱が発揮された姿（話し手）

自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えるために，英語表現を加えようとしている。

この姿の具体を段階的に捉えると以下ようになる。

発揮の度合	段階的に捉えた姿
	自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えるために，英語表現を加えて，試しに口に出して表現している。
	発表構想シートに伝えたいことを書き加えている。
	これまでと同じ英語表現を繰り返し用いて，自分の考えや気持ちを伝えている。

目標への情熱が発揮された姿（聞き手）

英語表現について質問・助言をしている。

この姿の具体を段階的に捉えると以下ようになる。

発揮の度合	段階的に捉えた姿
	英語表現について質問・助言をしようとしている。
	他者の考えや気持ちを聞いて，“I see.”や”OK.””Nice.”等の返答をしようとしている。
	他者の考えや気持ちを聞いて，頷いたり，あいづちを打ったりしている。

このように，目標への情熱を発揮する姿を促せるように，「真正な学び」と「個別最適な学び」を視点とし，以下のような学びのデザインの工夫を行う。

（２）学びのデザインの工夫

過程	学習活動
つかむ	コミュニケーションを図る目的や場面，状況が現実の生活に近い課題
	ALTと教師によるモデルを見聞きする
	コミュニケーションを図る目的や場面，状況に対する見通しをもつ
追究する	試しの活動を基に，個人の課題と学級全体における単元の課題を設定する
	英語表現に対する見通しをもつ
	学級全体のめあてを基に，個人のめあてをつかむ
	新出の英語表現を取り込む
	自分の考えや気持ちを伝える英語表現を構想する ↔ コミュニケーションを図る
	自分のコミュニケーションを基に，個人のめあてと課題の解決状況の振り返りをする
まとめる	※点線内部は単位時間ごとに繰り返し行う
	単元で学習した英語表現や既習の英語表現を用いてコミュニケーションを図り，単元の課題を解決する
	個人の課題や学級全体における単元の課題の解決状況の振り返りをする

本校英語科・英語活動における「真正な学び」は、単元を通して、「コミュニケーションを図る目的や場面、状況が現実の生活に近い課題」を解決する学習である。「コミュニケーションを図る目的や場面、状況が現実の生活に近い課題」とは、①子どもたちにとって伝えたい内容であること、②英語表現の難易度が子どもたちにとって適切であること、③コミュニケーションの対象が外国人、あるいは英語を用いる自然な場面であることを満たす課題である。図2には、教師が課題を構想する際に満たすべき要素とその効果を、図3には要素を満たした課題例を示した。

また、「個別最適な学び」として、学級全体の課題やめあてに加え、個人の課題やめあてを作成する機会を設定し、子どもたち一人一人が自己調整をしながら課題解決に取り組めるようにする。「つかむ」過程では、ALTと教師がコミュニケーションのモデルを演示し、子どもたちがその目的や場面、状況に気付けるようにする。そして、試しの活動を通して、うまく伝えられないことを自覚し、個人の課題と学級全体における単元の課題を設定する。「追究する」過程においては、ALTと教師によるモデルから英語表現についての見通しをもつ。次に、学級全体のめあてを基に、個人のめあてを設定する。そして、新出の英語表現を取り込み、自分の考えや気持ちを伝えたり、聞き手からの反応を基に、英語表現を改善したりしていく。振り返りの場面では、単位時間ごとに設定するめあてと単元の導入時に設定した個人の課題の解決状況について振り返りをする。「まとめる」過程では、これまで改善した英語表現を用いて、自分の考えや気持ちを伝えていく。単元の終末には、個人の課題に対して振り返りをする機会を設定し、課題の解決状況を自覚できるようにする。このような学びのデザインをすることにより、目標への情熱が高まり、社会に変革を起こす子どもの姿が現れることになる。

課題を構想する際に満たすべき要素	効果
①子どもたちにとって伝えたい内容であること ②英語表現の難易度が子どもたちにとって適切であること ③コミュニケーションの対象が外国人、あるいは英語を用いる自然な場面であること	・自分の考えや気持ちを他者に伝えたいという思いが高まる。 ・相手意識をよりもてるようになり、分かりやすく伝えたいという思いが生まれる。 ・英語表現を用いて考えや気持ちを伝える必要感が高まる。

＜図2 教師が課題を構想する際に満たすべき要素と効果＞

〔課題例〕

4年 海外のフードコートで食べたいランチセットメニューを作ろう

- ①フードコートは、海外だけでなく日本のショッピングセンター等にもよく設けられ、子どもたちにとって身近である。また、自分の好きなランチセットメニューを作ることは、自分の好きな食べ物や食べてみたい物を英語で表現できるため、子どもたちにとって伝えたい内容である。
- ②子どもたちは、"I like ~."や"Do you have ~?"等の既習の英語表現や、"What do you want?"や"I want ~."等の新出の英語表現を用いてランチセットメニューを作って紹介できる。
- ③海外のフードコートという場面は英語を用いる自然な場面である。

5年 留学生に日本文化の紹介をしよう

- ①日本文化を紹介することは、自分のお気に入りの食事や遊びなど、世界の人に知ってもらいたい日本文化を選択し、英語で表現できるため、子どもたちにとって伝えたい内容である。
- ②"We have ~."や"I can ~."等の既習の英語表現や、"We can enjoy~."や"I'm good at ~."等の新出の英語表現を用いて日本文化を紹介できる。
- ③日本文化について詳しく知らない留学生がコミュニケーションの対象であることは、英語を用いる必然性がある。

<図3 現実の生活に近い課題となる要素を満たす課題例>

試しの活動を基にした個人の課題と学級全体における単元の課題を作成する機会の設定

本校英語科・英語活動部が重視する非認知的能力である目標への情熱を発揮した子どもの姿が現れるためには、より分かりやすく自分の考えや気持ちを相手に伝えたいという思いや課題意識をもって学習に取り組むことが求められる。そこで、「つかむ」過程において試しの活動を行い、個人の課題と学級全体における単元の課題を作成する機会を設定する。この学習指導の工夫では、まず、子どもたちはALTと教師が演示するモデルを見聞きし、その後、写真やイラストを用いて、モデルを基にした1分程度の試しの活動に取り組む。この試しの活動は、単元の目的や場面、状況に応じて、①既習の英語表現を用いることができる活動と、②既習の英語表現を用いることができない活動が想定される。①では、ALTと教師によるモデルを見聞きした後に、子どもたちが英語表現を考え、1分程度のやりとりを友達と行う。また②では、ALTと教師によるモデルを見聞きした後、やりとりをするのに必要な英語表現の発音を確認し、1分程度のやりとりを友達と行う。①、②ともに教師は試しの活動後に、個人の課題について考える機会を設定する。そして、子どもたちから挙げられた意見を「できるようにしたいこと（知識・技能）」、「伝えたいこと（思考・判断・表現）」、「伝え方（学びに向かう人間性等）」の3観点で整理し、学級全体における単元の課題を作成していく。このように、自分が考えや気持ちをうまく伝えられないことを自覚し、課題解決のための見通しをもつことは、目標への情熱を発揮することにつながる。以下は、試しの活動および個人の課題と学級全体の単元の課題を作成する際の流れについてまとめたものである。

例：6年「小学校の思い出をALTに伝えよう」
 （既習の英語表現を用いることができる試しの活動）

①ALTと教師によるモデルの提示 ②英語表現と表現内容について考える 時間の設定



My best memory is the school trip. I went to Kusatsu. I ate *onsen-manju*. It was delicious.



I enjoyed を使って運動会について伝えようかな…。

③1分程度の試しの活動の設定



3種類の写真を用意

運動会って英語でなんて言うんだろう。リレーのことを伝えたいな。

I enjoyed 運動会…。

④個人の課題の設定と学級全体での共有

この単元でできるようになりたいこと（個人の課題）

運動会の楽しかった思い出をギャビン先生に分かりやすく伝えられるようにしたい。

↓ 学級で個人の課題を共有し、まとめる

発音できるようになりたい英語	伝えたいこと	伝え方の工夫・伝えるときに気をつけること
☐ 運動会を英語で言う ☐ 種目について英語で言う	☐ みんなで団結したこと ☐ 楽しい思い出になったこと	☐ 話す速さに気をつけて、分かりやすく伝えたい

⑤学級全体における単元の課題の設定

小学校の思い出を楽しさが伝わるようにALTの先生に伝えられるようになろう！

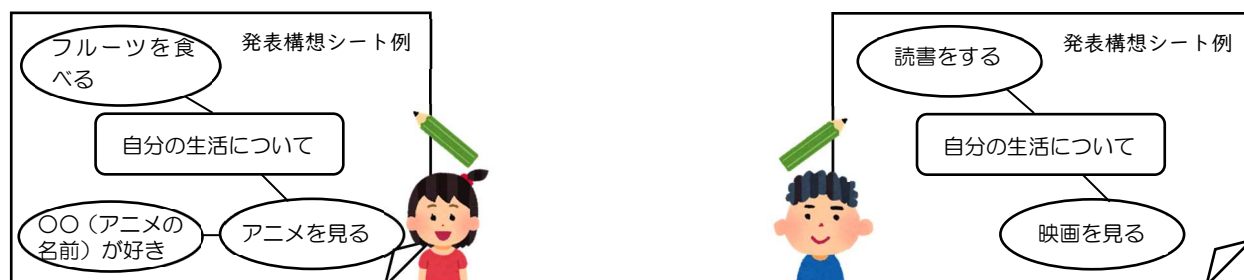
自分の考えや気持ちを伝える英語表現を構想する発表構想シートの用意

本校英語科・英語活動部が重視する非認知的能力である目標への情熱を発揮した子どもの姿が現れるために、話し手が英語表現を改善する見通しをもつことや、英語表現が改善したことを自覚し、さらに分かりやすく考えや気持ちを伝えたいという思いをもつことが求められる。また、聞き手は話し手の英語表現をより分かりやすくするために、質問・助言をしようとする思いをもつことが求められる。そこで、「追究する」過程において、自分の考えや気持ちを伝える英語表現を構想する発表構想シートの用意をする。この学習指導の工夫では、まず、発表構想シートに自分の伝えたい内容を記述する。発表構想シートには、「ウェビング図」を用いることで、英語表現の改善点に気付いたり、英語表現が改善された様子を視覚的に捉えたりできるようにする。次に、話し手は英語を用いて考えや気持ちを4～5人のグループ内の相手に発表をする。その際、聞き手は話し手の英語表現がより分かりやすくなるように、反応をする。発表後、話し手は、聞き手の反応を基に改めて英語表現を構想し、改善していく。反応については、子どもたちの学習段階を考慮し、英語だけでなく、日本語を用いることも認める。ただし、日本語を用いた場合は、学級全体でその英語表現を考える時間を設定することとする。このように、話し手は発表をし、聞き手の反応を基に構想をし、英語表現を改善するという流れを単位時間内に繰り返す。発表構想シートの用意をすることにより、聞き手は自分が発表構想シートに書いたことを参考にしながら相手の発表を聞くことができるため、相手の発表の改善点に気づき、反応をしたいという思いをもつことにつながる。また、話し手は、聞き手からの反応を受けることで、より分かりやすくなりたい

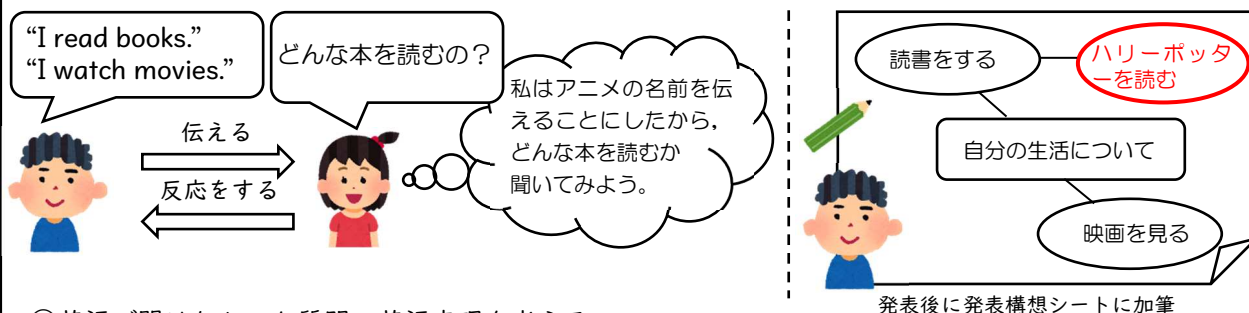
という思いをもつことにつながる。これらのことから、目標への情熱を発揮することができる。

例：４年「ＡＬＴの先生に自分の生活を紹介しよう」

①発表構想シートに伝えたいことを記入する。



②発表をし、聞き手の反応を基に英語表現を構想する。



③英語で聞けなかった質問の英語表現を考える。



④再び発表を行い、聞き手の反応を基に英語表現を構想し、改善していく。

４ 授業実践 ３年「もっとくわしく！自分のことをプレゼンテーション！」

（１）単元における学びのデザイン

子どもたちは、これまでに、スポーツや動物について好きな物や嫌いな物をＡＬＴに伝えることを通して、"I like~, but I don't like~."の英語表現の音声やリズムに慣れ親しんできた。しかし、相手からの反応を得られず、自分の紹介をより分かりやすくする必要性に気付けない子どもたちの姿が見られた。このため、英語表現を改善し、自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えられた子どもは少なかった。

このような子どもたちにとって、１年間、英語活動の授業を共にしてきたＡＬＴに、自分の趣味や宝物、特技について発表をすることは、ＡＬＴにもっと自分のことを知ってもらいたいという思いをもつことになる。そして、その思いの実現に向けて、目標への情熱を発揮しながら、自分の趣味や宝物、特技について発表をすることは、既習の英語表現である"I like~." "It's~."の英語表現を用いて、好きな物や様子、色を加えて発表をすることとなる。そのため、英語表現を改善し、自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えることができると考えた。つまり、人と人が分かり合うことにつながると考え、次頁のように、単元を構想し、学びのデザインを工夫した。

目標	A L Tに自分のことをもっと知ってもらうために、相手に伝わるように工夫しながら、趣味や宝物、特技の発表をする。	
評価 規 準	(①知・技) 身の回りの物やスポーツを表す英語と日本語の音声やリズムの相違点に気付いている。 (②思・判・表) 英語表現の選択・組合せをし、趣味や宝物、特技の発表をしている。 (③主体的態度) A L Tに伝わるように工夫しながら、英語表現を用いて趣味や宝物、特技の発表をしようとしている。	
言語 事項	I like books/video games/music/ TV drama/You Tube/movies. I have a (an) piano/snowboard/pet/racket/stuffed toy/bicycle. I can do/play/ski/snowboard/skateboard/draw/swim/use~. It's cool/cute/big/small/beautiful/great/expensive/cheap/fun/exciting.	
過程	時間	学習活動
つか か む 追 究 す る ま と め る	I	○子どもたち一人一人のことをもっと知りたいというA L Tの要望と趣味や宝物、特技のモデルを見聞きし、単元全体の課題 (Unit Goal) をつかむ。 Unit Goal ギャヴィン先生に自分のことをくわしく伝えられるように、止まらずにはっきりと趣味や宝物、特技の発表をしよう
	I	○身の回りの物を表す英語表現を用いた「スピードゲーム」をし、"I like~. I have ~."を用いて、趣味や宝物の発表をする。
	I	○動詞とスポーツを表す英語表現を用いた「ジェスチャーゲーム」をし、"I can ~."を用いて、特技の発表をする。
	I	○"I like~. I have~. I can~. It's~."を用いて、趣味や宝物、特技を伝える英語表現を改善する。(本時)
	I	○A L Tに趣味や宝物、特技の発表をする。

なお、本単元において、子どもたちが、「英語やその背景にある文化を捉え、A L Tに自分のことを分かりやすく伝えるために、英語表現や伝え方の選択・組合せをする」という見方・考え方を働かせながら、相手の反応を基に英語表現を加えられるようにしたい。そのため、自分の趣味や宝物、特技を伝える必要感や英語表現を改善する見通しをもてるよう、学びのデザイン及び学習指導の工夫を以下のように具体化して行った。

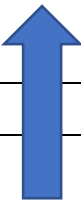
【学びのデザインの工夫の具体】

- ・「1年間、英語活動の授業を共にしてきたA L Tが、もっとみんなのことを知りたがっている」という、コミュニケーションを図る目的や場面、状況が現実の生活に近い課題の設定

【学習指導の工夫の具体】

- ・"I like~. I have~. I can~."の英語表現を用いて、趣味や宝物、特技を伝える試しの活動を基にした個人の課題と学級全体の単元の課題を作成する機会の設定
- ・自分の趣味や宝物、特技を伝える英語表現を構想する発表構想シートの用意

本単元において、段階的に捉えた重視する「非認知的能力を発揮した姿」の具体は、次頁のとおりである。

重視する非認知的能力：目標への情熱 (話し手)	
	より分かりやすく自分の趣味や宝物、特技を伝えるために、好きな物や様子、色を表す英語表現を加えて、試しに口に出して表現している。
	発表構想シートに、好きな物や様子、色を書き加えている。
	"I like～. I have～. I can～."の英語表現を繰り返し用いて、自分の趣味や宝物、特技を伝えている。
(聞き手)	
	他者の趣味や宝物、特技の発表を聞いて、英語表現について質問・助言をしようとしている。
	他者の趣味や宝物、特技の発表を聞いて、"I see."や"OK." "Nice."等の返答をしようとしている。
	他者の趣味や宝物、特技の発表を聞いて、頷いたり、あいづちを打ったりしている。

(2) 学びの実際 ※Gは抽出児、Cはその他の子ども、Tは教師、 は話し手、 は聞き手の非認知的能力を発揮した子どもの姿

【本研究以前における、重視する非認知的能力の側面から捉えた抽出児Gの実態】

これまでの学習においてGは、英語表現を用いて自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えることに向けて、コミュニケーションを図ってきた。繰り返し友達とコミュニケーションを図る中で、アイコンタクトやジェスチャー等の伝え方が分かりやすくなることはあったが、より分かりやすく伝えるために既習の英語表現を用いて考えや気持ちを伝える姿は見られなかった。このようなGは、本単元において、以下のように学びを進めていった。

【本単元における、子どもたちや抽出児Gの学び】

①「つかむ」過程（第1時）

第1時、子どもたちは、ALTの"I like books."や"I have a snowboard.", "I can juggle."等の趣味や宝物、特技を伝えるモデルや「1週間に1度しか授業がないので、みんなのことを知らないから、もっと知りたい」という要望を見聞きした後、試しの活動を行った。それから、本単元においてできるようになりたいことをTryシートに記述し、学級全体で話し合った。話し合いでは、「趣味や宝物、特技についてスラスラと言えるようになりたい」「宝物の英語が言えなかったから言えるようになりたい」「ALTの先生にもっと自分のことを伝えられるようになりたい」等の意見が出た。これらの意見を基に、Unit Goal（単元全体の課題）を立てた。

(図4) Gは、試しの活動において、"I like piano. I...have... piano. I can..."と趣味は、自信をもって伝えられていたが、宝物や特技については、はっきりと伝えることができなかった。(図5)そこで、Gは、本単元においてできるようになりたいこととして、Try

大がかりのみんなができるようになりたいことを書く		
物 (I have～)	しゅみ	止まらずに
ようす、色	持っている物	はきり、正しく
スポーツなど	とくき	
Unit Goal: キャビン先生に自分のことをくわしく伝えられるように 止まらずにはきりとしゅみや持っている物、とくきを発表しよう		

<図4 子どもたちと作成した Unit Goal>



<図5 Gの試しの活動時の様子>

1	はっきり言えるようにしたい!! きつやつとしない言葉もおぼえたい!!
---	---------------------------------------

<図6 第1時のGの Try シート>

シートに記述していた。(図6)

②「追究する」過程(第2～4時)

第2～3時、子どもたちは、ALTの趣味や宝物、特技を伝えるモデルや「みんなが普段している好きなことや大切にしている物を知りたい」という要望を見聞きした後、第2時のめあてとして、「自分の趣味や宝物をコミュニケーションポイントに気を付けて伝えよう」、第3時のめあてとして、「とくぎをはっきりと止まらずに伝えよう」を立てた。そして、子どもたちが一人一人、個人のめあてを考えた。その後、趣味や宝物、特技を表す英語表現の発音を確認し、ゲームを行い、繰り返し聞いたり発音したりした。最後に、グループ内でペアをつくり、趣味や宝物、特技について伝え合った。その際、教師は、発表をユニークにする視点として、「好きな物」(I like～)を提示し、自分のことをより分かりやすく伝えるために、発表に加えるよう伝えた。Gは、第2時にペアで趣味や宝物を伝え合う際、"I like piano. I have Switch, *Doubutsu no Mori*."と伝えていた。また、第3時にペアで趣味や宝物、特技を伝え合う際、"I like piano. I have Switch, *Doubutsu no Mori*. I can do ballet."と伝えていた。そして、Gは、Tryシートに個人のめあてやできるようになったこと、もっと必要なこととして、記述していた。(図7)

時間	自分のめあて	めあてのたっぴい達	分かったことやできるようになったこと	Unit Goal や自分のかだいをたっせいするために、もっとひつようなこと
2	好きなことばとかを止まらずにすらすらいいます。	A B C	きょうはこないた。おはえられた。言葉が。おはえられた。	もっといろんなおはえたい!!
3	とくぎの言い方は、はっきりしたい。	A B C	きょうはとくぎの言い方。おはえられた。	もっとはやく言いたい!!

<図7 第2・3時のGのTryシート>

第4時、子どもたちは、はじめに、JTEの"I like smart phone games."や"I have a wireless earphone.", "I can play basketball."等の趣味、宝物、特技、様子、色を伝えるモデルを見聞きした。次に、モデルで話されていた内容について話し合い、ALTの「みんなの趣味や宝物、特技についてもっといろいろなことを知りたい」という要望を聞いた。そこで、本時のめあてとして「英語を付け加えて、自分のことをよりくわしく伝えられるようになろう」を立てた。そして、子どもたちが一人一人、個人のめあてを立てた。その後、教師は、グループ内で発表をし合い、発表構想シートを用いて英語表現を構想するよう促した。グループ内で、発表構想シートを用いて英語表現を構想し、Gが話し手として発表をしている際の様子とは以下のとおりである。

G : "I like piano. ...I have a Switch. I like *Doubutsu no Mori*. ...I can do ballet."

(タブレットの画像を指しながら)

C1 : バレエは、楽しい?

G : うん。楽しいよ。

C2 : "It's fun."を最後に加えてみたらどう。

G : (頷きながら) そうしてみる。

(発表構想シートに記入する)(図8)

C3 : ピアノでどんな曲が弾ける?

G : ううん。いろいろ弾けるけど…。(3秒程度沈黙)

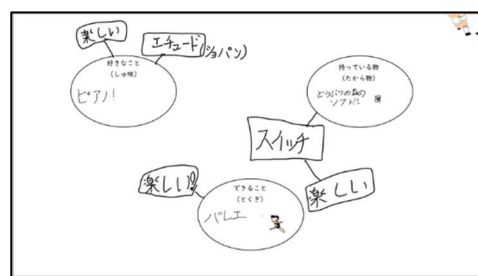
ショパンが好きだから、"I like Chopin."を入れてみよう。

(発表構想シートに記入する)(図8)

G : もう一回言ってみるから、聞いて。

"I like piano. ...I like Chopin. ...I have a ...Switch. I like *Doubutsu no Mori*. ...I can do ballet. It's fun."

C2 : "Great."



<図8 Gの発表構想シート>



<図9 Gがグループ内で発表をしている様子>

このように、Gは、友達からの質問や助言を受けて、"It's fun.", "I like Chopin."の英語表現を加えていた。(図 9) このGの姿は、話し手としての目標への情熱が十分に発揮された姿である。

その後、Gはグループ内の友達の発表を聞いた。Gが聞き手として、C1の発表を聞いている際の様子は以下のとおりである。

C1: "I like Switch. ...I like Pokemon Legends Arceus. I have a ...snowboard. I can do snowboard."
 G: "Nice" このスノーボードって何色? (タブレットの画像を指しながら)
 C1: いろんな色があるんだよね。青とかピンクとか黄色とか。(3秒沈黙) どう言えばいいのかな。
 C2: "Colorful." でいいんじゃない。
 C1: そうか。じゃあ、"It's colorful."を入れてみるね。
 C3: スノーボードは楽しいよね?
 C1: すごい楽しいけれど、"fun" より"exciting"のほうがいいかな。もう一回言ってみるね。
 "I like Switch. I like Pokemon Legends Arceus. I have a snowboard. ... (2秒沈黙)
 It's colorful. I can do snowboard. (3秒沈黙) It's exciting."
 G: "Good. Good" (大きな声で)

このように、Gは、発表を聞いて、英語表現を加えてC1の発表が分かりやすくなるように質問をしていた。このGの姿は、聞き手としての目標への情熱が十分に発揮された姿である。

第4時の最後に、子どもたちは、他のグループの友達と相手を替えながら、趣味や宝物、特技を繰り返し伝え合った。そして、Gは、Tryシートに個人のめあてやできるようになったこと、もっと必要なことを、記述していた。

A	どうせ、いえるように努力したい。	(A) B C	きょうはこないだいえた、たまたまわからないことがあってとまってしまったからとまらないようにしたい。
---	------------------	---------	---

<図 10 第4時のGのTryシート>

(図 10)

③「まとめる」過程 (第5時)

第5時、子どもたちは、はじめに、ALTの「今日はみんなの発表を聞けるので、とても楽しみだ」という話を聞いた。次に、自分が発表で用いる英語表現をグループ内で確認した後、ALTに向けて発表をした。GがALTに発表をした内容は以下のとおりである。

G: "Hello."
 T: "Hello."
 G: "I'm~ (名前). I like piano. I like Chopin. I have a Switch. I like *Doubutsu no Mori*. ...I can do ballet. (自分がバレエをしている写真を指しながら) It's fun. Thank you."
 T: "Wow!" "Nice."

このように、Gは、自分の趣味や宝物、特技に加えて、好きな作曲家やゲームソフト、特技の様子を加えて分かりやすく自分のことを伝えていた。(図 11) その後、Gは、Tryシートに、Unit Goalや自分の課題について、できるようになったことや感想として記述していた。

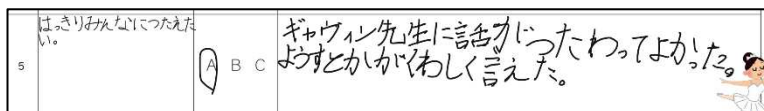
(図 12)

単元全体を通して、Gは、英語表現を改善し、自分の趣味や宝物、特技を分かりやすく伝えようとしたり、友達に反応をしたり姿が



<図 11 GがALTに発表をしている様子>

見られた。この姿が見られた要因は、3点考えられる。1点目は、試しの活動を通して感じた個人の課題を基に、単元全体の課題（Unit Goal）についてコミュニケーションを図る目的や場面、状況が現実の生活に近い課題にしたことにより、英語を用いて自分のことをALTにもっと分かりやすく伝えたいという思いをもてたことによるものである。2点目は、毎時間、個人のめあてを設定したことにより、子どもたち一人一人が単位時間ごとに自分ができるようになりたいことを明確にもつことができたことによるものである。3点目は、発表構想シートの用意をしたことにより、英語表現の構想がしやすくなり、友達からの質問や助言を基に、自分の趣味や宝物、特技についての発表を分かりやすくするために必要な情報に気付くことができたことによるものである。また、自分が発表構想シートに書き加えた内容を参考にし、友達の発表をより分かりやすくしようと、質問や助言をしようという思いが促されたことによるものである。



＜図12 第5時のGのTryシート＞

学級全体においても、9割以上の子どもたちが趣味や宝物、特技の英語表現の他に好きな物や色、様子を表す英語表現を加えて、自分のことを分かりやすく伝えることができていた。ALTに発表した後のTryシートの記述からも、自分のことを分かりやすく伝えられたことに達成感を得られた子どもが9割以上見られた。

以上のように、子どもたちが目標への情熱を発揮するための学習指導の工夫を行ったことにより、聞き手として相手の英語表現の改善をするために質問や助言をしたり、話し手としてそれを基に、英語表現を改善して伝えたりする姿につながったと考えられる。この姿は、本校英語科・英語活動部が捉える「社会に変革を起こす子ども」の育成に向かっているものである。

5 成果と課題

本校英語科・英語活動における問題解決的な学習の中で、社会に変革を起こす子どもの育成に向けて、「非認知的能力を発揮する姿」が現れるための学びのプロセスと、そのプロセスが生み出す学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○成果

学びのデザインの工夫として、コミュニケーションを図る目的や場面、状況が現実の生活に近い課題を設定したことにより、子どもたちがコミュニケーションを図ることへの必要感をもつことができ、相手に自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えたいという思いを高めることができた。そして、分かりやすく伝えるために、自分の英語表現を改善しようとする姿が見られた。

また、試しの活動を基にした個人の課題と学級全体における単元の課題を作成する機会を設定したことにより、子どもたちは自分の考えや気持ちをうまく伝えられないことを自覚し、課題解決に向けて見通しをもって単元の学習に取り組むことができた。そして、毎時間、個人の課題の解決に必要なことを自覚し、自分の英語表現を改善しようとする姿が見られた。

さらに、自分の考えや気持ちを伝える英語表現を構想する発表構想シートの用意をしたことにより、聞き手は話し手の発表をより分かりやすくしようという思いをもって反応をしながら聞く姿が見られた。また、話し手は、聞き手からの反応を基に自分の英語表現を改善しようとする姿が見られた。

これらの姿は英語科・英語活動における目標への情熱を発揮した姿である。これは、本校英語科・英語活動研究における学びのデザインの工夫や学習指導の工夫が、社会に変革を起こす子どもの姿として捉えている「聞き手の反応を基に改善した英語表現で考えや気持ちを伝え、相手の英語表現を改善する

子ども」の育成へ向かっていると考えられる。

○課題

目標への情熱を発揮したことにより、自分の考えや気持ちをより分かりやすく伝えるために、英語表現を改善しようとする姿が見られた。しかし、改善しようとした姿が見られたにもかかわらず、実際に自分の考えや気持ちを伝える際、これまでと同じ英語表現を繰り返し用いている姿が見られた。その要因として、加えた英語表現に自信をもてなかったためと考えられる。そこで、本校英語科・英語活動部が捉える社会に変革を起こす子どもの姿に近づくためには、目標への情熱に加え、自分の英語表現は他者に伝わるという前向きな思いである自信を発揮する必要がある。今後は、自信を発揮できるように、新たに加えたい英語表現や伝えられなかった英語表現を繰り返し自分で確認できる学習指導の工夫を行っていききたい。

【参考文献】

・山田誠志【編著】『自分の本当の気持ちを「考えながら話す」小学校英語授業』平成30年8月、日本標準。